

1 スペイン語の産声－聖ミリャン修道院の注解

Glosas Emilianenses

スペイン中北部のLa Rioja州 はとても小さな自治州である。ここはブドウ酒の産地として有名だが、その中心地Logroño の近くに中世の詩人Gonzalo de Berceo の生誕地Berceo村がある。そこからさらに進むと美しい聖ミリャン修道院 (Monasterio de San Millán) にたどり着く(【写真 1】)¹。ここまで脚を伸ばしたら、ぜひ「上の修道院」(Monasterio de Suso) まで昇ることをお勧めしたい。スペイン中世の歴史に思いを馳せながら静かな田舎の景色を楽しむことができる。



【写真 1】 サンミリャン修道院

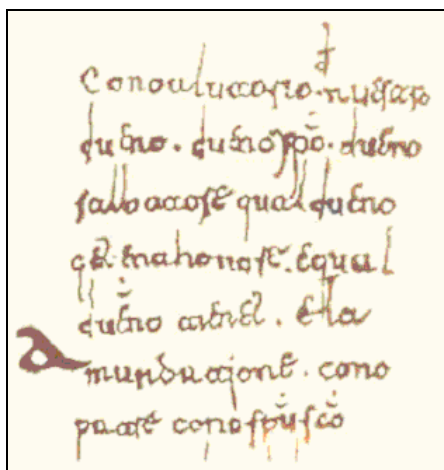
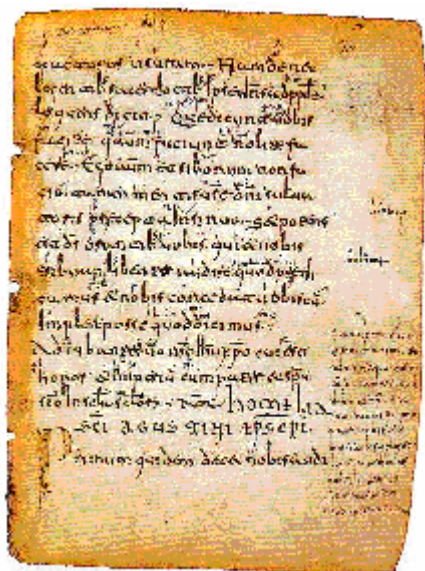
スペイン語の歴史を勉強する人にとってここは最重要地点の一つである。なぜなら、この修道院(「下の修道院」Monasterio de Yuso)でスペイン語の歴史上最初の文献『聖ミリャン修道院の注解』(Glosas Emilianenses) が発見されたからだ。スペイン語の「最初の産声」(primer vagido) とされるこの文献はおおよそ 10~11 世紀のものと思われている²。

¹ Gonzalo de Berceo (1185?-1264) もこの修道院で教育を受けた。

² 「最初の産声」というのはスペインの言語学者Dámaso Alonsoの比喩だが、周知のよ

●余白の書き込み

私たちはテキストを通して外国語を学ぶときページの余白に難解な外国語の意味を日本語で書き込むことがある。一千年前の修道院で聖人の説教などをラテン語で学んでいた修道士たちも、貴重な羊皮紙の行間や余白に彼らの話し言葉(当時のスペイン語)で意味を記していた(【写真2】: Ministerio de Educación y Ciencia, 1977)。これが、ラテン語の意味を知るといふ修道士たちの意図とは反対に³, 後世の私たちにスペイン語の原初の形態を知る手がかりを与えてくれることになった。



【写真2】 聖ミリアン修道院の注解

うにスペイン語はラテン語の話し言葉から徐々に段階的に発展した言語であり、当然のことながら特定の時間と空間の一点で突然呱呱(ここ)の声をあげたというわけではない。("Nunca podemos cortar por un punto y decir: Aquí está el español recién nacido. Pero en el espectro hay un instante en el que ya estamos seguros de ver color amarillo y no verde. Se trata, pues, de saber cuál es el primer testimonio conocido que caiga ya del lado del español, y no del latín.") Dámaso Alonso. "El primer vagido de la lengua española", en *De los siglos oscuros al de oro*. Madrid: Gredos.「けっしてある一点で切り取り、『ここに生まれたばかりのスペイン語がある』などと言うことはできない。しかし、スペクトルの中にもすでにはっきりと黄色であって、もはや緑色ではないという瞬間がある。つまり、ラテン語ではなくスペイン語となった最初の証拠がどこにあるかを探る問題である」

³ 太田 (1988, 89) によれば、ここに書かれているラテン語(中世ラテン語)はあまり教養のない人によって書かれたと思われ、俗語(当時の話し言葉であった黎明期のスペイン語)の反映と思われる誤りが多数見られる、という。

■テキスト

本文のラテン語のテキストは紀元 4~5 世紀に遡る『教父たちの生涯』(Vitae Patrum)中の「最後の審判」についての小話である。行間や欄外に細かな字で書き込まれたスペイン語による注記を、以下のテキストでは括弧内に示してある。

(1)

Et ecce repente (lueco) unus de principibus ejus ueniens adorabit eum. Cui dixit diabolus unde uenis? Et respondit: fui jn alia prouincia et suscitabi (lebantai) bellum (pugna) et effusiones (bertiziones) sanguinum ... similiter respondit: jn mare fui et suscitabi (lebantai) conmotiones (moueturas) et submersi (trastorne) nabes cum omnibus...

【語句】⁴**lueco** > luego すぐに**lebantai** > levanté 引き起こした**bertiziones** > efusiones, derramamientos 流すこと**lebantai** > levanté 引き起こした **moueturas** : agitaciones 騒動 **trastorne** > trastorné.

【訳】ここですぐに首領の一人が来て彼(悪魔)に挨拶した。その者に悪魔は「お前はどこから来たのか」と聞いた。すると彼は答えた「私はよその土地におりました。そして戦さと流血を引き起こして参りました」...同様に、彼は答えた「私は海へ行って嵐を引き起こし皆を乗せた船を転覆させました」

このラテン語の本文の中に当時のロマンス語⁵の形で記された括弧内の注記は行間や欄外に細かな字で書き込まれたものである。

このテキストの中にすでに後のスペイン語の形を窺わせるいくつかの現象が見られる。Lat.locus > lueco (o>ue) には二重母音化があるし、bertiziones や terzero (<Lat. tertiarus) には破擦音化([tj] > [ts]) が起きている。文法形態については-turaによる動

⁴ 当時のスペイン語は現代スペイン語の形とかなり異なるので、以下では変化の前と後を「>」の記号と使って示し、語源の異なるものは「:」で示す。

⁵ 「ロマンス語」(Romance) とは俗ラテン語から派生した当時の話し言葉のことである。また、今日のスペイン語やフランス語、イタリア語、ルーマニア語などは「ロマンス諸語」(lenguas romances, lenguas románicas) という。

作名詞 (>-dura), そして点過去の1人称単数形 -éに至る段階 -avi > -ai > -éが揃って出ている (levantai, levantai, trastorne)⁶。

(2)

Incipiunt sermones cotidiani beati Agustini. Gaudeamus fratres karissimi et Deo gratias agimus, quia uos, secundum desideria nostra, incolmes (sanos et salbos) jnueniri meruimus (izioqui dugu). Et uere fratres juste et merito (mondamiente) pater gaudet quotiens filios suos et corpore sanos et Deo deuotos (promissiones) jnuenerit;

【語句】**sanos et salbos** > sanos y salvos 無事に **izioqui dugu** : lo hemos encendido (バスク語, ただしラテン語の意味と一致しない) **mondamiente** > puramente, limpiamente **promissiones** > promesas 約束

【訳】福者アウグスティヌスの毎日の説教が始まる。「親愛なる兄弟たちよ、喜びなさい、そして私たちは神に感謝を捧げましょう。なぜなら、あなた方は私たちが希望がなくなって無事であったからです。そして、主はその子らが健全にそして神に忠実であるのもご覧になったので、確かに主は正しく清い心のあなた方をお喜びになっておられるのです」

●副詞語尾 mente

スペイン語の副詞語尾 **mente** はラテン語 **mens** 「気持ち」に由来するが⁷, 古くは **mentre** という語形が使われていた。これは後の **Cantar de Mio Cid** などでも多く見られる。

さて、この千年前の修道士は辞書⁸の引き方を間違えることがあった。**deuotos** : **promissiones** というのは意味的に見ておかしい。これはラテン語 **deuotos** を **de uotos** と誤

⁶ **lueco** や **mouetura** の **-c-** や **-t-** には、まだ有声化の兆し^{きざ}が現れていない。「注解」の作者の方言 (リオハ方言 **el riojano**) はこの点でいくぶん保守的であった。なお、**Wolf** (1996, 1997) は **Glosas** がむしろ古アラゴン方言の特徴を示していると主張している。

⁷ これに対して英語の副詞語尾 **ly** は古英語 (OE) の **lic** 「体」 (:body) に由来する。

⁸ 異なる「注解」に同じロマンス語形が繰り返し出現するので今日では失われているラテン語とロマンス語の語彙集 (**Glosario**) が使われていたと推測されるが (**Menéndez Pidal**, 1942), これには異説がある (**Wright**, 1989)。

って切り, uotos : promissionesと解釈している。辻褃のあわない意味をそのままにして
おいたのだろうか。

(3)

Intelligite (jntellegentja abete) karissimi, quia non jdeo christiani facti sumus ut
dejsta vita tantum solliciti simus (ansiosusegamus) ... Non nobis sufficit (non
conuinet anobis) quod chirstianum nomen accepimus si opera christiana non
facimus...

【語句】**jntellegentja** > inteligencia 聡明さ **abete** : tened 持て(命令) **ansiosusegamus** >
ansiosos seamos 願うことにしよう **nos sificieremus** > si nosotros hicieremos もし我々がし
ようものなら **guedc ajutuezdugu** : nosotros no nos arrojamus (バスク語) 我々は墜ちる
だろう **non conuinet anobis** > a nosotros no nos conviene

【訳】親愛なる人々よ。現世のことを望むだけで私たちはキリスト教徒になったのではな
いということを理解しなさい。...キリスト教徒らしき行いをしないで、キリスト教徒の名をい
ただくだけでは足りないのです。

●haber と tener

「持つ」はフランス語では avoir (< Lat.habere) であるが、現代スペイン語では tener
(< Lat.tenere) を使う。しかし、スペイン語でも古くは avere (> Mod. haber)が使われて
いたことがこの十世紀の文献からわかる (abete). vosotros の命令形-ed は、まだラテン
語の-ate, -ete, -ite のままであったらしい。

(4)

... Nolite uos occupare (parare uel aplicare) ad litigandum (demandare) set potius
(plus maijus) ad orandum, ut non rixando Deum offendere (gerrare).

【語句】**plus maijus** > más さらに **gerrare** > errar 怒らせる

【訳】争いよりも祈りを望まなければならない。争いによって神の怒りに触れないように。

●比較級

ラテン語のoccupareには2つのラテン語の注 (parere uel applicare, demandare) がある。また、Lat.potius にも2つの語が並んでいる。plus (<Lat.plus), maijus (<Lat.magis)。現代語では後者に由来する más が用いられるが、当時は両方が並存していたようだ⁹。

次の一節にはとくに注目したい。

(5)

... adjubante domino nostro Jhesu Christo cui est honor et jmperium cum Patre et Spiritu Sancto jn secula seculorum [conoajutorio de nuestro dueno, dueno Christo, dueno Salvatore, qual dueno get ena honore, equal duenno tienet ela mandatjone cono Patre, cono Spiritu Sancto, enos sieculos delosieculos. Facanos Deus omnipotes tal serbitjo fere ke denante ela sua face gaudioso segamus. Amem.]

【語句】**conoajutorio** > con la ayuda 援助によって **dueno** > dueño 主 **Salvatore** > salvador 救世主 **get** > es ...である **tienet** > tiene 持つ **mandatjone** (> mandar) 力 **cono** > con el **Patre** > padre 主 **Spiritu Sanctu** > Espíritu Santo 聖霊 **enos** > en los **sieculos** > siglos **Facanos** > Háganos 我らに...させてください **serbitjo** > servicio 奉仕 **fere** > hacer する **ke** > que **denante** > delante ...の前で **ela** > la (冠詞) **sua** > su 彼の **face** > faz, cara 顔 **gaudioso** > gozoso (次の segamus の最初の s- と融合したため複数を示す語尾 s が無い) **segamus** > seamos **Amem** > Amen アメン。

【訳】^{ほま} 誉れ高く、また未来永劫にわたって父であり聖霊とともに支配される我らが主イエスキリストの御力によって...

これまでは語句の注解ばかりであったが、ここに当時の言葉で書かれた完全な文がある。次がその現代語訳である¹⁰。

Con ayuda de nuestro Señor don Cristo, don Salvador, Señor que está en el honor y

⁹ 隣のフランス語や中央のイタリア語では新しく出現したplus, piùである。一方、maijus はポルトガル語 (mais) やルーマニア語 (mai) など周辺地域に残存している。ラテン語の比較級は形容詞の変化形によるものであった。Lat. Petrus fortior est quam Paulus. Sp. Pedro es más fuerte que Pablo. / Po. O Pedro é mais forte do que o Paulo. / Fr. Pierre est plus fort que Paul. / It. Pietro è più forte di Paolo. / Rum. Petru este mai puternic decât Pavel. 例文は伊藤太吾 (1994), p.118 から。

¹⁰ cf. Juan B. Olarte Ruiz. (1977) p.17.

Señor que tiene el poder con el Padre y con el Espíritu Santo. Háganos Dios Todo poderoso hacer tal servicio que delante de su faz seamos gozosos. Amén.

【訳】誉れ高く父と聖霊とともに未来永劫に支配される我らが主キリスト、救い主のお力によって。全能の神よ、我らがあなたの拝顔の喜びを享受できますように我らを奉仕へと導きたまえ。アメン。

●el＋女性名詞

elo, elaはラテン語にはなかった定冠詞である。このelo, elaはその対格のLat.illu(m), illa(m)に^{さかのぼ}り、ラテン語では「あの」という意味の指示詞であった。現代語でel aguaのように、アクセントのあるa- (ha-) ではじまる女性名詞の前にはelという形が用いられるのは、ela + aguaの2つのaの連続が融合したためである。よって歴史的に見ればaguaの前で「男性」冠詞elが使われている、ということではない。

●融合形

最初の語はconoとajutorioに分けられる。conoは前置詞conと定冠詞eloの融合形である。eloは-nで終わる前置詞がつくとはじめに語頭のe- が脱落し(>enlo), さらに-nl-が融合して-nn-となり、これが弱勢であったために-n-と短縮したものと考えられる。同様な融合は前置詞enでも起こる(en los > enos)¹¹。

●母音の変化

nuestroはすでに現代語形である。Lat.nosterの対格nostrumに由来する。dueno Christoのduenoは敬称であって、Mod.Sp.donとなった¹²。sieculosはsaeculu(m)のae > eが二重母音化してieとなったもので、このe > ieも先のo > ueと同様にスペイン語の特徴である。

¹¹ 前置詞と定冠詞の融合はとくにポルトガル語やイタリア語で顕著である。Po. em + o > no, em + a > na; por + o > pelo; por + a > pela. It. con + il > col, con + la > colla; in + il > nel, in + la > nella. これに対してフランス語では、à + le > au, à + les > aux, de + le > du, de + les > desのように、融合する前置詞はàとdeに限られる。現代スペイン語では、さらにその単数形に限られる。Sp. a + el > al, de + el > del.

¹² donとdueñoのように同一の語源を持ちながら異なる音韻変化をたどったために別の語となった2語(同語源異形)を「二重語」(doblete) という。

●hacer

この節に fere (< Lat.facere) という不定詞がある。ラテン語にあった4つの動詞の活用型、-a□re, -e□re, -e□re, -i□re はスペイン語では-e□re と-e□re が合流し(後に語末の-e が脱落した)結果、-ar, -er, -ir の3種となった。その例外が fac(e)re > Mod. fer である。しかし、これも後に類推(analogía)が働いて Mod. hacer となった。

●異化

次に注目したいのは *denante ela sua face* である。まず, *denante* (< Lat.de in ante) は後に *Mod. delante* となったが, これは2つの n...n の連続を避け l...n としたためである。このように, 1 つの音が別の音を異なるものにする働きを「異化」(disimilación)という。*ela* は先に見た定冠詞 *elo* の女性形で, 次の *sua* は所有形容詞 *suo* (Lat.suus) の女性形である。現代語では定冠詞を所有形容詞の前につけないが, 当時のスペイン語では定冠詞がついていた。

●文法形態

文法形態については**定冠詞** (Lat.illu > elo, illa > ela), **前置詞と冠詞の融合** (cono > con el; enos > en los), **-mientras** という**副詞語尾**, **点過去形** -é (-ávi > -ái > é) などの変化に注目したい。

●語彙

語彙の面でも多くの言葉がラテン語と袂たもとを分かつこととなった。matata (:Lat.strages), culpauiles (:Lat.reus), uotas (:Lat.nubtias)。また sano y salvos (: Lat.incolmes) など現代語でも使われる熟語がすでに現れていた。

こうしてヨーロッパの南西端の半島に産声をあげたスペイン語は母なるラテン語の多くを継承しながらも独自の道を歩み始めた。

●文字と発音

現代スペイン語には, a, b, d などのように, 1つの音だけを示している文字がある一方, c, g などのように, 2つの音を示す文字があるのはなぜだろうか。[b] という1つの音を示すのになぜ b と v という異なる文字があるのだろうか。ch, ll のように, 2つの文字で1つの音を示したり, ñ という英語などにはない文字があるのはなぜだろうか。先のような

古いテキストを読むと、現代スペイン語の文字と発音の関係がどのような理由に基づくのかがわかる。

「注解」の原文はビシゴード文字とよばれる手書きの書体で書かれてあるので少し読みにくい。上のテキストと照合すればどうにか文字を辿っていける(【写真】)。ここで気をつけたいことはそれぞれの文字が何の音を示していたか、という点である。アルファベットは基本的に意味ではなく音を示すので、書かれたとおりに発音できるのだが、一部注意しなければならない文字がある。それは、ラテン語から変化した音を示す文字である。

スペイン語で新しくできた音としてとくに重要なのは母音ではie, ueという二重母音であり、子音では現代語でch, ll, ñ などで書かれる硬口蓋音である¹³。新しく生まれた音を文字で示すには次の3つの方法が考えられる。(1) 二重母音ie, ueのように古い文字をそのまま使う。(2) ch, llのように古い文字を2つ組み合わせる。(3) ñのように新しい文字を作る。このように現代語の文字はそれぞれ合理的だが、千年前は音と文字の関係がまだ確定されていなかったようだ。たとえばテキストにあるdueno [dueño] という語では二重母音は確かに表記されているが、[ñ] を示すñという文字はまだ考案されていなかったものでnのままである。

また、serbitjoは当時 [serbítsio] と発音されていたと思われる。これが現代スペイン語ではservicio [serbítsio] となった。serbitjo(「注解」)の文字bは [b] の発音を示しているが、現代スペイン語のservicioのvはラテン語の語源(servire「仕える」)に基づく。servicioのcの[ts] という発音はiとeの前で起きた [ti] > [ts] > [ts] という変化によるものである。一方、a, o, uの間ではそのような変化が起きなかったので、con のように [k] のままである。gも同様にiとeの前で [xi, xe] 「ヒ、ヘ」という音に変化した。

●強勢母音の変化

強勢母音の全体の変化を示すと次のようになる¹⁴。

Lat.a > Sp. a Lat.latus > Sp. lado 側

¹³ これら二つの現象は隣接する東西の2つの言語、ガリシアポルトガル語 (gallego-portugués) やカタルーニャ語とは異なるスペイン語の特徴である。先のテキストの中には次の例がある。

Lat.loco > Med. lueco (>Mod. luego)

Lat.noster > Med. nuestro

Lat.tenet > Med. tiene

Lat.signale > Med. seingnale [señále] (>Mod. señal)

¹⁴ Menéndez Pidal (1968), p.44.

Lat.a□ > Sp. a	Lat.gra□nu > Sp. grano 粒
Lat.e□ > Sp. ie	Lat.te□rra > Sp. tierra 土地
Lat.e□ > Sp. e	Lat.re□te > Sp. red 網
Lat.i□ > Sp. e	Lat.ci□bu 食物 > Sp. cebo 餌
Lat.i□ > Sp. i	Lat.fi□cu > Sp. higo イチジク
Lat.o□ > Sp. ue	Lat.no□vu(m) > Sp. nuevo 新しい
Lat.o□ > Sp. o	Lat.leo□ne > Sp. león ライオン
Lat.u□ > Sp. o	Lat.bu□cca 頬(ほほ) > Sp. boca 口
Lat.u□ > Sp. u	Lat.cu□pa > Sp. cuba 桶 (おけ)

●無強勢の母音の変化

ここで無強勢の母音も整理しておこう。はじめに、語頭の位置では次の変化を経て 5 つの母音が生まれた。

Lat.a□ > Sp. a	Lat.a□ra□tru > Sp. arado 鋤
Lat.a□ > Sp. a	Lat.pa□na□ria > Sp. panera パンかご
Lat.e□ > Sp. e	Lat.te□rre□nu > Sp. terreno 土地
Lat.e□ > Sp. e	Lat.se□cu□ru > Sp. seguro 確かな
Lat.i□ > Sp. e	Lat.pli□care > Sp. llegar 到着する
Lat.i□ > Sp. i	Lat.fi□caria > Sp. higuera イチジクの木
Lat.o□ > Sp. o	Lat.do□lo□re > Sp. dolor 痛み
Lat.o□ > Sp. o	Lat.so□lanus > Sp. solano (植)イヌホオズキ
Lat.u□ > Sp. o	Lat.lu□cra□re > Sp. lograr 得る
Lat.u□ > Sp. u	Lat.du□ritia > Sp. dureza 堅さ

次は語末の無強勢母音の変化である。その結果、a, e, o の 3 つの母音になった。

Lat.a□ > Sp. a	Lat.causa□(m) > Sp. cosa こと
Lat.a□ > Sp. a	Lat.causa□s > Sp. cosas こと(複)
Lat.e□ > Sp. e	Lat.patre□m > Sp. padre 父親
Lat.e□ > Sp. e	Lat.patre□s > Sp. padres 両親
Lat.i□ > Sp. e	Lat.legi□t > Sp. lee 彼は読む
Lat.i□ > Sp. e	Lat.dixi□ > Sp. dije 私は言った
Lat.o□ > Sp. o	Lat.amo□ > Sp. amo 私は愛する

Lat.o > Sp. o Lat.servo[s] > Sp. siervos 奴隸 (複数)
 Lat.u > Sp. o Lat.servu[m] > Sp. siervo 奴隸
 Lat.u > Sp. o Lat.lucu[s] > Sp. lagos湖¹⁵

●異なる文字

10~13 世紀の文字と発音はまだ発音と文字の関係が統一されていなかった。しかし、そこには一定の傾向があった。以下はそれぞれの発音に対して用いられた異なる文字を並べたものである。

- (1) 二重母音:[ie] i, e, ie // [ue] o, oi, u, ue
- (2) 硬口蓋音:[ç] g, j, i, y, z // [ɲ] ni, nj, ng, gn, nn, n // [ɳ] li, lu, ll // [x] x, ix, sc, isc, ss // [dʒ] li, lli, g, j // [tʃ] g, i, gg, x, ch
- (3) その他:[ts] z, c, ç, cc // [z] -s- // [β] b, u, v

●語根母音変化動詞 (1)¹⁶

現代語のいわゆる「語根母音変化」動詞の活用形は歴史的には e > ie と o > ue の二重母音化から説明できる。

pensar		contar	
pi <u>en</u> so	pi <u>en</u> samos	cu <u>en</u> to	cu <u>en</u> tamos
pi <u>en</u> sas	pi <u>en</u> sáis	cu <u>en</u> tas	cu <u>en</u> taís
pi <u>en</u> sa	pi <u>en</u> san	cu <u>en</u> ta	cu <u>en</u> tan

それぞれの活用形の中で語根のeやoに強勢がある語形で二重母音化が生じるのである。ところでこれら二重母音化がおこる動詞はラテン語の短母音に起源のあるものだけで、たとえばdebere > deberやorare>orarはラテン語の長母音に由来するのでまた、presentarやadorarなどは後期にラテン語から直接スペイン語に取り入れられた語なので¹⁷、やはり二重母音化はない。

¹⁵ 以上はMenéndez Pidal, *Gram.Hist.* の例であるが、語末の長母音にはラテン語の複数対格の例をあげている (Lat.causs, patrs, servs, lacs). これはロマンス語で-sという複数語尾が確立して、直接にcosa + -s > cosasになったとも考えられる。

¹⁶ pedir, sentir, dormirのタイプは2で扱う。

¹⁷ 後期にラテン語から直接スペイン語に取り入れられた語をスペイン語学の用語で「教養語」(palabra culta, cultismo) という。一方、話し言葉のラテン語が変化して伝わった語を「民衆語」(palabra vernácula)と呼ぶ。

- 【課題 1a】** ラテン語とスペイン語の名詞と動詞の変化形を比較しなさい。
- 【課題 1b】** ラテン語とスペイン語の語の形と意味を比較しなさい。
- 【課題 1c】** スペイン語の民衆語と教養語を語形(音韻)と意味の面から比較しなさい。
- 【課題 1d】** テキスト(5)の写真の文字について気づいたことを述べなさい。

【参考文献】

- Alatorre, Antonio. 1989. *Los 1,001 años de la lengua española*. México: Fondo de Cultura Económica.
- Alonso, Dámaso. 1958. "El primer vagido de la lengua española", en *De los siglos oscuros al de oro*. Madrid: Gredos.
- Díaz Díaz, Manuel. 1978. *Las primeras glosas hispánicas*. Barcelona.
- 伊藤太吾. 1994. 『ロマンス語学入門』大阪外国語大学。
- Lapesa, Rafael. 1981. *Historia de la lengua española*, novena edición. 9ª ed. Madrid, Gredos. 山田善郎監修, 中岡省治・三好準之助訳『スペイン語の歴史』昭和堂, 2004. とくに, Cap.VI.
- Menéndez Pidal, Ramón. 1942. *El idioma español en sus primeros tiempos*. Madrid. Espasa-Calpe. Colección Austral.
- Menéndez Pidal, Ramón. 1968¹³. *Manual de gramática histórica española*, Madrid: Espasa-Calpe. 近松洋男訳『スペイン語歴史文法教本』風間書房, 1996, とくに Cap. I, II.
- Menéndez Pidal, Ramón. 1980⁹ *Orígenes del español*, (9a ed.) Madrid: Espasa-Calpe.
- Ministerio de Educación y Ciencia, 1977. *Las glosas emilianense*.
- Olarte Ruiz, Juan B. 1977. "En torno a las glosas emilianenses", Ministerio de Educación y Ciencia
- 太田強正. 1988, 1989. 「Glosas Emilianenses 研究 I, II」『ロマンス語研究』(日本ロマンス語学会), 21, pp. 43-53; 22. pp.31-77.
- Quilis Merín, Mercedes. 1999. *Orígenes históricos de la lengua española*. Universidad de Valencia.
- Torreblanca, Máximo. 1992. "En torno a las glosas emilianenses y las silenses", en *scripta philologica in honorem Juan M. Lope Blanch*, México. UNAM,

pp.469-479.

Wright, Roger. 1982. *Latín tardío y romance temprano en España y la Francia carolingia*. Madrid. Gredos.

Wolf, Heinz Jürgen. 1966. *Las glosas emilianenses*. Sevilla.

Wolf, Heinz Jürgen. 1997. "Las glosas emilianenses, otra vez", *Revista de Filología Románica* (Univ. Complutense), 14, pp.597-604.

FIN